

ミステリ読書案内

2022. 8. 3 発行元

第382号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

堂場瞬一の代表作

日本の「警察小説」の分野で現在最も活躍している作家のひとりが堂場瞬一。かなりの速筆で、2001年のスタートからもう既に100冊を軽く超えるスピードで本を出している。代表作3冊を取り上げてみよう。

読むのが追いつかない

堂場瞬一と言えば「文庫本書下ろし」のイメージだが、途中からはスポーツ小説を含めて単行本も出すようになり、読む方はとても追いつかない。私は今、一時「堂場本」読書休止状態になっている。

図書館に行くとなたくさん並んでいる。佐伯泰英とまでは行かなくても「読みたい」と要望を出している人がいるのだろう。現代社会に密着したテーマを取り上げている作品が多いし、厚めの本とはいいながら比較的読みやすい文章。怪奇的、猟奇的、暴力的な方向に流れない歯止

めもしっかりしている。話の盛り上げ方も作品を追うごとに上手になってきた。

代表作を考える時、どうしても初期の頃のシリーズに目が行ってしまう。中期以降はややマンネリの感がないでもない。『鳴沢了』シリーズからは第一作『雪虫』を選ぶことも考えたのだが、作品の完成度を考慮して『久遠』にした。

ここには取り上げなかったが『警視庁失踪課・高城賢吾』『警視庁追跡調査係』『刑事の挑戦・一之瀬拓真』などたくさんシリーズものを手掛けている。読者の好みのシリーズを発見できるとよいだろう。

NO.3「身代わりの空」

2017年講談社文庫。『警視庁犯罪被害者支援課』シリーズの四巻目。上下二冊セットになっており、同シリーズの中では最高の出来。警視庁総務部に属している「犯罪被害者支援課」という設定が現代社会の有り様にピッタリ嵌まっている。「私」として登場してくるのはその支援課の村野秋生。

今回は富山空港で起きた旅客機墜落事故が発端。死者が20名で負傷者は多数。警察の多くの職員が対応に駆り出されるのは当然のことだが、事故に巻き込まれた人達に対処するのは非常に難しい。それなのに遺体のひとつは身元不明のまま、捜査は難航する。やがて、毒殺事件で指名手配されている本井忠介という人物が浮かび上がってくる…。

NO.1「久遠 刑事・鳴沢了」

2008年中公文庫。『刑事・鳴沢了』シリーズの完結編に当たる十巻目。文庫本で上下二冊セット。このシリーズは『雪虫』から始まる堂場瞬一の出世作であり、一作ごとに彼の成長の跡が感じられる懐かしいシリーズである。特にこの十巻目は力作。

これまでのいろいろな紆余曲折があって西八王子署の刑事として勤めている鳴沢了。今回も本人自身が巻き込まれる事件を描いている。朝、無言電話で起こされる。続いてインターフォンが鳴る。出てみると青山署の刑事が二人。「ご同行願います」というわけで、鳴沢はある情報屋殺害事件の容疑者と見なされる。このように、この鳴沢シリーズは単なる事件捜査ではなく、鳴沢自身が抱えるゴタゴタがストーリー展開に大きく関わってくるのが特徴。よって物語は長く伸びていく。もう少し簡潔でもよいのでは…と思うほど、鳴沢本人の問題に拘るのである。そこが他の「警察小説」とはやや違う。その上、鳴沢本人は捜査本部の指示に従わないことも多く、窮地に追い込まれる流れが多いのだ。殺された情報屋に前日の夜に会っており、その際、新しい糸口になりそうに「ABC」という秘密めいた言葉を聞かされていた。鳴沢は自分の嫌疑を晴らすため、今までの関係者の協力も得ながら、700ページに渡る長い長い苦難の道を進んでいくのだ。

No.2「アナザーフェイス」

2010年文春文庫。(背表紙の色の灰色が似ているので紛らわしいが、こちらは文藝春秋である) 『アナザーフェイス』シリーズの一卷目。『鳴沢了』シリーズよりはステップアップした。主人公は警視庁刑事総務課に勤務する大友鉄。二年ほど前に妻を亡くし、小学二年の優斗を育てながら仕事をしている。定時に帰宅できることを求めて捜査一課から裏方に移動させてもらった。しかし、警察というところは突発的な非常事態になると決まり事どおりに動けないことが生じる。そんな時助けを求めるのが亡くなった妻の母親・聖子。優斗を預ってもらうことになるのだが…。義母はなかなか理解のある人物なのだが、大友にとっては壁が高い。一言一言が身に染みる。家庭を取るのか、仕事を取るのか…。今回は目黒署管内で発生した銀行員の子どもの誘拐事件。他管内の事件なので出番が来るとは考えていなかったのだが、元上司の福原から「元刑事としての能力を発揮しろ」と強制的に駆り出されてしまう。動き始めれば、それはそれで本能的に解決目指して頭脳が回転する。「最も刑事らしくない刑事」と呼ばれる大友鉄の活躍は…。